Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 55

保育科学生の絵本観の分析
——「子どもと一緒に楽しむ」という視点をめぐって——

布施 佐代子
（中京 短期大学）

目　的

保育の分野には、従来、「絵本の読み聞かせ」ということばがある。絵本という「教材」・文化財を通して、子どもに何かを伝え、「教える」というニュアンスが強く感じられることばであるが、はたして絵本とは、子どもに「読み聞かせる」ものなのだろうか。そもそも、絵本は、紙芝居とは異なり、子ども自身がひとりで手にとり、めくりながらじっくり絵やストーリーを楽しむことができるという特質を持つ。そこからは、絵本に描かれている世界を、いわば絵本そのものを子どもと一緒に味わい、子どもと一緒に気持ちを通わせながら「楽しむ」という視点が成立する。

保育者養成課程で、実習等で実際に子どもたちに絵本を読む立場に立った時、学生たちは概して「先生」として子どもたちに何かを「教え」てあげよう、「教え」なければと考えるようである。絵本は子どもに「読んであげる」ものと考えがちな保育科学生たちは、絵本を「子どもと一緒に楽しむ」という視点をどう受けとめるだろうか。本研究では、この点について分析・検討し、保育者養成教育のあり方を考えるひとつの手だてとしたい。

方　法

C短期大学保育科（男女共学，幼児教育コースと社会福祉コースあり）の1年次学生154名対象に、本研究者担当の「発達心理学Ⅰ」の講義（通年・4単位）において、12月中旬、冬休み前に「子どもの心と絵本」というテーマでレポートを課した。

学生たちは、幼稚園や小学校時代以来絵本に触れる機会がなかった者から、高校時代に保育実習に行き絵本を読んだり作ったりしたことのある者まで、短大入学までの絵本体験はさまざまであった。しかし、入学後1年間は、「発達心理学Ⅰ」の講義で週1回1冊ずつ「絵本タイム」（教員である本研究者が毎時間の講義の終わり約10分間ほど、学生たちにむけて絵本を読む）を全員が共通に体験している。今年度の「絵本タイム」で読まれた絵本は、次のとおりである。

・ぐりとぐら・おおきなかぶ・はらぺこあおむし・わたしのいもうと・100万回生きたねこ・とんことり・きんぎょがにげた・ぬずみくんのチョッキ・また！ぬずみくんのチョッキ・またまた！ぬずみくんのチョッキ・ちいちゃんのかげおくり・ぐりとぐらのかいすいよく・いないいないばあ・のせてのせて・そらいろのたね・さっちゃんのまほうのて・三びきのやぎのがらがらどん・おばけのバーバパパ・はじめてのおつかい・だるまちゃんとてんぐちゃん・サンタクロースってほんとにいるの？・まどからおくりもの・しろくまちゃんのほっとけーき・てぶくろ　（計 24冊）

本研究では、保育科学生たちに課したレポートのうち、「『絵本は、子どもに読み聞かせるというより、むしろ、子どもと一緒に楽しむものである』という意見について、自分なりの考えを述べよ。」という問題に対する学生の回答が、主な資料として事例的に分析・検討された。

結　果　と　考　察

1.「絵本を子どもに読み聞かせる」ということについて：

「絵本は、子どもに読み聞かせるというより、むしろ、子どもと一緒に楽しむものである」という意見については、異議を唱える学生はいなかった。「読み聞かせる」ということばに対し批判的な目を向けているレポートとしては、次のようなものがあった。

①「～させる」というのは、強制的に聞こえます。絵本って、そんなものではないと思います。なぜなら、夢、希望・喜びを味わうものだと思うからです。
（学生A・女子）

②読み聞かせるというと、大人だけが理解して、子どもは内容を本当に楽しんだのか、わからないし、手ごたえもありません。テープに録音してでも、できてしまいます。それでは、さみしすぎます。絵本を子どもと一緒に読むときは、物語も大切ですが、登場する物・人・動物など、子どもの興味をもったものに話がそれていってしまっても、それはそれでいいと思います。絵本を通して、親と子ども、先生と子どもなどの間が、もっと深くなると思うので、一緒に楽しむという考えは、私はいいと思います。大人が主体ではなく、子どもが主体で絵本を読むといった感じが理想です。
（学生B・女子）

③「読み聞かせる」というと、なんとも大人の方がえ

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

らそうな気がする。これでは子どもとも差が出てしまうような気がします。絵本というのは、子どもばかりではなく大人も楽しめる物であり、時に、大人は子どもに教えられる事も少なくはないはずである。そういう意味でも、一緒に楽しむというのは適切であろう。
（学生C・男子）

なかには、一緒に楽しむことを認めつつも、「時には、読み聞かせるような場合も必要ではないか。絵本は楽しいものばかりではない。少ししんみりするものや悲しいもの――「さっちゃんのまほうのて」や「わたしのいもうと」のようなのは、しっかり聞かせてやりたい。そして、一緒に考えたり話し合ったりしてみたい。」という意見もあった。絵本の内容に応じて、子どもと一緒に考えたいという姿勢がうかがえる。

2.「絵本を子どもと一緒に楽しむ」ことの意味について：

「絵本を子どもと一緒に楽しむ」ことの意味については、次のような点があげられていた。

a. 気持ちを通わせ、子どもと大人（保育者・親）がコミュニケーションできる。とくに共働き家庭など、親子のふれあう時間が少ない場合は、大切なコミュニケーションの場となるのではないか。
b. 子どもの心に残り、本が好きになるきっかけにもなる。

とくにaに関しては、「読む大人がつまらなそうに読んだり、棒読みしたりでは、子どももつまらないと思う。大人が楽しそうに読むと、子どもも楽しくなると思う。」という学生は多かった。なぜだろうか。

これについては、講義や実習での絵本体験が大きく関与しているようである。

たとえば、自分自身の実習体験から、実感をこめて述べている次のようなレポートがあった。

④「この前の保育実習の時、何冊も何冊も読んだ。その時も、子どもに読ませると同時に、自分でも楽しんでいた。子どもが楽しむ所を自分でも一緒に楽しむ事によって、子どもの気持ちを理解し、読み方も変わってくるのではないだろうか。」（学生D・男子）

⑤「気持ちの問題としては、子どもたち以上に読み手の方が楽しくなければいけないような気がします。子どもというのは、大人が思っている以上に、物事に対する好奇心は旺盛なものだと思うので、大人が子ども以上に楽しくすれば、子どもにとっては一緒くらい楽しくなるものだと思います。自分も実習の時、子どもに絵本を読みましたが、自分がおもしろいと思ったところが子どもにとっては自分以上におもしろいらしくて、それが表情に出ていて、自分も楽しくなったのをおぼえています。」（学生E・男子）

⑥「実習に行った時、園児に「先生、本読んで」と言われた。「えっ」と思いながらも一生懸命感情をこめて読んだ。読んでいて疲れてきたりして、ただ淡々と読むようになっていたら、園児も聞いていなくなっていた。「しまった」とものすごく後悔した。自分がこの本楽しいなと感じたら、読み方も変わってくる。すると自然と園児たちの顔も「次は？」「次は？」と期待にワクワクしてくる。そこで「どうなるんだろうね」と声をかけると、「次はね」と知っている子は教えてくれる。読み終えると「もう1回」とせがむ。その声を聞くと、自分も充実感を味わえるし、園児の顔もとても満足そうだった。そんな経験をしたので、よけいに、ただ聞かせるだけじゃなくて、いろんな工夫をして、一緒に楽しむ方が、お互いに満足できるんではないかと思う。（学生F・女子）

講義の「絵本タイム」で自分が受けたある「感動」から意見を述べている次のようなレポートもあった。

⑦ 私は絵本なんて読んであげればいいと考えていました。そんなに深く絵本というものに関心がなかったからです。「いないいないばあ」この本も知った時、こんな絵本もあるのだと驚きました。読み手も聞き手も一緒になって楽しめる絵本なんて、なんてすばらしいのだろうと感動しました。この絵本をきっかけとして、私は絵本に対する考え方が変わりました。読み手は、絵本の中に入り込んで夢中になり楽しんでいる子どもを見て楽しくなるし、逆に子どもは絵本の絵、そして読み手の気持ちの入った読み方にいつでも楽しく絵本と接するでしょう。絵本を通じて、楽しみ合うことができるのです。（学生G・女子）

また本研究者の絵本の読み方を見聞きして、「絵本を一緒に楽しむ」ことの意味を自分なりにつかみ取ってくれた学生も少なからずいた。（例：「講義で読まれた絵本がすごく印象に残ったり、絵本タイムが楽しみだったり、いい話だな、かわいいな、私も欲しいなと思ったりしたのは、読んでくださった先生がとても楽しそうに心をこめて読んでくださったからだと思うのです。」（学生H、女子））毎時間「学生と一緒に感じ考え楽しみたい」という思いをこめて絵本を読んだ本研究者の思いが少しでも伝わったのだろうか。

今後は、具体的にどんな絵本でどのように子どもと楽しみたいと学生が考えているか、2年次での保育実習でその成果がどう生かされるか、さらに分析を加えながら、学生の絵本観の育ちをみつめ支えていきたい。

NII-Electronic Library Service